●戦後日本美術史の見取り図 (2)
中ザワ「現代美術史日本篇」p.63　循環史観

■5d ポストモダニズムと循環史観
Postmodernism and Circulation Historical View

ところで進歩史観はポストモダニズムによって否定されましたが、全く非歴史的な時間を私たちが生きているとは限りません。ポストモダンという時代も歴史の一部なのではないでしょうか？

私は歴史法則主義の立場です。図式的な単純化に偏る危険があるとしても、循環史観的な見取り図をここに提示しておきます。

現実肯定的な時代精神は、美術界においては熱い「表現主義的動向」として現れ、その盛り上がりの頂点において一転、現実否定的な時代精神が、冷たい「反芸術的動向」として現れます。続く時代は否定性の内在化に向かう還元主義的動向と、否定されてしまった現実の外側に逃避しようとするシュルレアリスム的動向とが共存する長い時間ですが、時代支配的なイズムの後退につれて「多様性」が惹起します。ここまでの流れを一サイクルとするならば、これは20世紀前半の西洋美術史に「欧州の戦前のモダニズム」として典型的に顕れていたものです*5d1。そして20世紀後半の美術史は、アメリカであれ欧州であれ日本であれ、これと同型のサイクルが、さらに二回繰り返されたのだと考えることができます。下表をご覧ください。

すなわち日本においては、1955年頃の高度成長の幕開けに伴う「具体」「九州派」「アンフォルメル旋風」が表現主義的動向で (本書第2章「前衛」)、1960年頃の安保闘争に伴う「ネオ・ダダ」「ハイレッド・センター」「ポップ・アート」が反芸術的動向でした (本書第3章「反芸術」)。1964年頃以降、東京オリンピックや大阪万博の開幕に伴う「日本概念派」「もの派」の還元主義に引き続き、冷戦体制の固定化に伴う「美共闘」「ポスト概念派」「ポストもの派」はイズムの後退が惹起した多様性の顕れでした (本書第4章「還元主義と多様性」)。ここまでが20世紀後半の第一サイクル、すなわち「日本の戦後のモダニズム」だったといえます*5d2。

第二サイクル、すなわち「日本のポストモダニズム」の幕開けは、西武が「じぶん、新発見」と謳った1980年頃でした。表現主義的動向が「超少女」「ヘタうま」「パルコ」として再臨し、前時代との断絶が顕わとなりました (本書第5章「脱前衛」)。そして1985年頃以降、バブル経済の進行と崩壊に伴い反芸術的動向が「関西ポップ」「東京ポップ」として再臨しました (本書第6章「再現芸術」)。1995年頃以降、地下鉄サリン事件や世界同時多発テロに伴う「快楽絵画」「スーパーフラット」「方法主義」が、イズムの後退が惹起した多様性の再臨です (本書第7章「マニエリスムと多様性」)。私が本稿を書いている2008年現在は、いまだこの多様性の渦中です。

この循環史観の提示によって私が言いたいことは、大きく二つあります。

一つは歴史として見た場合、時代支配的なイズムとしての「表現主義的動向」と「反芸術的動向」が短命ながらも重要で、長く続く「多様性」は豊かである代わりにさほど重要ではないということです。もちろん個々の作家が重要ではないわけではありません。

もう一つはサイクルを超えた縦の線の存在です。例えば「アンフォルメル旋風」と「パルコ」を繋げると見えてくるものは、ともに極めて多数の無名の表現者たちを生んだことです。日本におけるアンフォルメルは西洋追随として否定的に語られ、パルコの日グラは商業美術として無視されがちです。しかし歴史としては、表現者たちを突き動かす力学やエネルギーこそが記述されるべきなのではないでしょうか。また「ネオ・ダダ」と「東京ポップ」を繋げると見えてくるものは、他者の視点から歴史の繰り返しに見えるだけではありません。当事者である篠原有司男や村上隆が、それぞれ自覚的に前時代のダダやネオ・ダダを参照したのです。次章を「再現芸術」と冠した理由はそこにもあります。

	表現主義	反芸術	多様性
欧州の戦前のモダニズム	表現主義	ダダイズム	抽象とシュルレアリスム
日本の戦後のモダニズム	具体	ネオ・ダダ	もの派と概念派と美共闘
日本のポストモダニズム	ヘタうま	東京ポップ	スーパーフラットと方法

Although progressive history view was rejected by postmodernism, this does not necessarily mean we live in a non-historical time. Isn't postmodern era part of the history as well?

I am taking a stance of law of history principle. There may be a danger of leaning towards simplification, but a rough sketch of the circulation history view will be presented here.

The reality-affirming Zeitgeist emerged as a hot "expressionism trend," and as soon as it reached its peak, it underwent a sudden change and the reality-denying Zeitgeist set in as an cool "anti-art trend" emerged. The following era lasted a long time when a trend in which reductionism headed towards negative immanency and a surrealistic trend which tried to escape towards the outside of a denied reality coexisted, but as the regression of the dominating "ism" of the era set in, it gave rise to "diversity." If the time up to this point is to be seen as one cycle, then this was a cycle which typically appeared as "modernism before the World War II in Europe" in the first half of Western